

## 「『歌集 水平線』」

2019年04月22日

渡辺英俊牧師は、主イエスの福音は貧しく、弱くさせられている人々に向けられていると、最後の伝道地を「寿町」と定め、懸命に伝道され、数年前、隠退された。渡辺先生から発せられる言葉は強烈で、多くの人々の信仰を覚醒させ、私も多くのことを学んできた。先生は、今年3月に『歌集 水平線』（DTP出版）を上梓され、私にも送ってくださった。私は新聞、雑誌に載る短歌には目を通してはいるが、自ら詠むほどの感性と文才は持っていない。『水平線』を読み、先生の短歌への情熱に深く感動した。先生は高校生時代から、齋藤茂吉門下の伊東生更の教えを受け、短歌の道に精進されている。牧師になられ、長いブランクがあったが、フィリピン留学、なか伝道所開設などから、袴を着た牧師ではなく、ありのままの自分でいられるようになり、また、ご両親を送る時期、故郷への思いが重なり、歌が湧き出るようになられた。歌集名の『水平線』は、ピースボートの講師として乗船され、何日も、水平線を見てきた体験から付けられた。歌集をまとめる動機は、奥様が2017年11月に急逝され、大切な存在を失い、想いが歌にあふれてきて、奥様への感謝を込めて、記録に残したいという願いが抑えきれなくなったことだと書いておられる。1996年から2018年までの様々な出来事に因んで、歌をまとめて編集している。私は、最近の歌に殊に感銘を受け、涙ながらに読んだ。

急逝された奥様に関する5首。「最終の特急に乗りて駆けつけしその夜の記憶全き空白」奥様の急逝された知らせを受け、甲州に向かったが、その夜の出来事は全くの空白である。「さよならもありがとうも言はず汝れ逝けり風に乗りたるエリヤのごとく」別れの言葉もなく、火の車で天に昇ったエリヤのように風に乗って逝ってしまった。「独りなる冷たき部屋の待てるのみ賑ひの席逃れ来ぬれど」賑わいのある所から逃れて来たけれども、私を待っているのは冷たい部屋である。「汝が逝きて思い知りたり倅（しあは）せは涙と共に振り返るもの」奥様との日々は幸せだったと涙と共に振り返っている。「諍（いさか）ひし彼の日想へば亡き人の叱言（こごと）恋ほしも不機嫌恋ほしも」諍いをした日のことを想うと、亡くなられた奥様の小言や不機嫌も恋しくて仕方がない。

先生の今の信仰を詠った2首。「愛満つる神の世界のやがて来むそを望みつつ死を生きむかな」愛に満ちた世界が実現する終末の日を待ち望みながら、老の今を生きていこう。「大いなる受容の雲に包まるるそのとき言はむ『生きて良かった』」神に受容される輝かしい終末の時、「生きて良かった」と言えるような生でありたい。終末への憧れが、今を精一杯生きる力となるのである。

その他から4首。「存在の外に意味なし存在は存在することが意味なのだから」最近、意味のある者だけが生きる価値があるとする優生思想が蔓延している。存在そのものに意味ありと宣言されたのがイエス・キリストである。「砂粒の一つといへどゼロならず国会に向かふデモにわがをり」デモに行くと無力感に襲われることがある。しかし、ゼロではない、明日の日本のためだと思う。「青年の中身のままに八十年生きてしまひぬ悔いも誇りも」この句を読み、吹き出してしまった。先生は確かに、血気にはやる青年のような時もあった。しかし、老成し、自己変革できない老人よりは、ずっと誇れるのではないか。「『出て行け』と叫（おら）ぶこの国が怖いと言ふ在日の友あり『戦後七十年』」嫌韓のヘイトスピーチが多くなった。自己同一化する国は弱体化する。多様性を受け入れる国が真の豊かさを得る。先生が渾身の力を込めて上梓された歌集を、皆様も読んでください。